



## 知られざる卒業生

杉井六郎

チャペルの檯上で、私はさし込むような底冷えと緊張で膝ががくがくしていた。私は、さっきから、卒業生の席から、ずっと後の方にはなれた父兄席のある一点を凝視しながら、いろいろな想いに頭をまごめかねていた。

## 随 想

ああ、お母さん「よく来てくださった」「来ておられるぞ」「卒業するのだ」と、想念のまともまらないうちに、私の卒業生呼名の順番がやってきた。何某、何某……、私は、ついに卒業生名簿にない彼の名前を呼ぶことができなかった。

私の精一杯の努力は、彼のあるべき名簿の順番のところで、その行間をみつめて、一息、二息と、間をおくに過ぎなかった。岩倉の卒業式において、まぼろしの卒業生は現前しなかった。遺影は友人の胸にいだかれて、その列の中におりつつも。

近日、私は、また、あの時の事態を顧みる立場に立たされた。そして、あの時、私のとった態度がよかったのか、あるいは、勇気が足りなかったのか思いかえしてみた。

私の常識は、度のすぎた演出的な処遇を拒否する、それは、形式的な残骸に自分にはうつるからだ。しかし、一面、学校においては、そんなことも案外許されることのような気もする。とにかく事態はこうだ。昭和三十四年四月、私は岩倉の三年C組の担任となった。授業の関係から、それま

で一回も教室で顔を合わせた人はなく、それぞれ生徒は、私にとって、全く未知の人たちばかりである。彼もその一人であった。

私も彼も、バスで通学していた関係から通り一遍の目礼はしていたが、全く知ることがなかった。その彼が、四月廿八日、学校からの帰途、不幸にも交通事故にあい廿九日あげがた、不帰の客となった。お葬式がすみ、十日祭、廿日祭と過ぎてから、一人息子の彼の家は、彼ばかりか親も高校三年生であることを知った。類まれな好青年であり、全く純情無垢、篤実真摯な生徒であったことも知った。

学校の生徒名簿から名前が消えて、九月の中ごろ、二学期の授業料を納めたいと、両親は申し出られた。そして、それは三学期も同様であった。

しかし、現実には、その姿を求めえなかった両親は、放課後、ひっそり静まりかえった学校に来ては、消えた息子の姿を追い求めたようである。永遠に創造と運動がとまってしまった息子に代って、ヒマラヤ杉が鶏鳴館の傍に五本植えられた。その杉は

いま、若芽を出して、ぐんぐん、天に向って伸びている。そして、それから六年経過した。

この春、彼は大学を卒業した。彼の友達には、卒業式の夜、いまでも、そのままに残されている彼の部屋で、両親に卒業の報告をし、卒業記念のバッチを父親の胸につけてあげた。この四月廿九日、六周年祭の夜、父親は言う「大学を出ましたよ」と。

(高校教諭・社会)

## 赤い西瓜

上林 猷夫

住谷悦治先生が、大塚節治前総長のあとをうけて、第十四代総長に就任されることにきまつたという新聞記事を読んだとき、私は何かしら大きな安堵を覚えた。

それは多分先生があくまで自己の信念をまげず、戦中戦後の苦難を経て、学究としての誠実さを貫かれたのであり、現在の同志社に最も必要な人として、先生が選ばれたというさわかさであると思うわれ

る。

私の入った頃の同志社高商には、はじめて憲法の講座をもたれた田畑忍先生がおられ、そして住谷悦治先生からは経済史を、資本論の訳者である長谷部文雄先生からは独逸語を、また組担任の片山春一先生からは英語を学んだうえ、岡山県人会長や、友人と一緒に創設した同志社モータークラブでの部長にもなっていたりして、個人的にもたいへんお世話にあずかった。

このように、学問上でも人間的にも尊敬できる先生が多数おられ、非常な誇りに思つた。間もなく満州事変が起こり、それから上海事変につづき、しだいに戦争前夜の様相を深めて行き、京都市中でも左右学生の衝突事件が頻発するようになった。言論もだんだん弾圧され、私は私なりにはじめに詩の形式で思いを述べることを選び、三行くらいの短詩形で諷刺的な詩を書いたりしていた。

昭和八年、京大では滝川事件が起き、進歩的な教授の身辺にいろいろ噂が流れはじめ、京都には何となく重苦しい空気がみながぎっていたが、ある日突然、住谷先生が下

鴨署へ留置されるという事件が起きたのである。私は特別に先生に親しくしていただいていたわけではないが、もう夏休み中で、多分京大で行なわれていた天野貞祐博士のカント哲学の特別講義を受けていたときであつたと思うが、下鴨署へお見舞に行つた。先生はいつもと少しも変らぬ澄んだ目をして、椅子に座つておられた。ちょうど奥さんが見えており、先生にすすめるために持参された西瓜にザクリ、ナイフを入れて、真つ二つに割れたその鮮烈な赤が、いつまでも私の頭に強い印象となつて残つた。

その後、先生の書かれたもので知つたのだが、学生に旅費を貸したことが、共産党のシンパとして無実の自白を迫られ、足腰を蹴り上げられるなど刑事の拷問を身をもって体験されたあげく、教職を退いて失業となり、「思想犯保護観察」として、当局の侮辱に耐えてこられたのである。私は終戦後間もなく、四国へ渡られる先生を、偶然、岡山駅でおみかけし、御無事なお姿に非常な喜びを感じたが、それから大分して再び同志社の教授として迎えられ、このた

び先生が総長に就任されたのである。

この貴い三十年の歳月を背負われた住谷先生が、いま同志社の総長として存在するということだけで、私は必ずや同志社は大きな歴史の時を刻むであろうことを確信している一人である。去る四月十三日、東京麻布プリンスホテルで開かれた住谷悦治先生総長就任祝賀会で、先生の大きく暖かな手でしっかりと握られたとき、私はかつて下鴨署でみたあの鮮烈な赤い西瓜が蘇ってきて、不覚にも涙がにじんできて仕方がなかった。(昭九高商卒・日本現代詩人会理事長)

## 乗物酔い

滝山 季乃

私の乗物酔いも、この頃はもう薬が効かなくなり、病やまいこうもうに入った感じである。その辛さは言語に絶する、と言っても決して大げさではない。酔いが始まると、耳の下から頬のあたりが、冷水を浴びたような悪感をおぼえ、撫でると、ぶつぶつの鳥肌になっている。やがて胃の辺が重苦し

くなり、全身、言いようのない不快感におそわれる。傍の人はさだめし不愉快で、つまらぬ人を道連れにしたと後悔しているであらうが、本人はそれどころでなく、今は死をさえ慕う気持なのである。

ところが、乗物を降り、足が大地をふみしめて一時間もすると、けろりと治つてしまうので、なかなか人に同情してもらえない。そればかりか、どんなに訴えても、気のせいですよ、と一笑される。私自身も、そうかとも思うので、長い旅をする時は、二三日前から、私なりに努めるのである。

まず食事に注意して胃腸をととのえ、夜は早く休み、物事に腹を立てぬようにして気を静めておく。また、当日着るものも、胸元をしめつけない。ゆつたりしたのを用意する。幸い汽車には強いので、なるべく汽車旅を選び、よほどでない、バスや飛行機には乗らない。飛行機は今までに何回か乗ったが、私には最低の乗物になった。これほど注意しても、最近、近距離の自動車にさえ酔うことがある。全く情ないと思うが、本当だから仕方がない。

一方、この乗物酔いで、わが意を得たり、

と感じたことがある。それは、トマス・ハーデー作「良心のために」を読んだ時であった。話の筋をかんとんに述べると、中年の独身者M氏には、若い頃、事情あつて結婚できなかった女性があつた。その女が音楽の塾を開いて、彼との間の娘を育て上げた。と伝え聞いた彼は、遅まきながら結婚の約束を果たそうと思ひ立つ。そして漸く母娘を探し当てるが、女から、今となっては、と冷く拒絶される。彼はそれに屈せず、年頃の娘には両親が揃っている方がよいと説得して、結婚を強行する。或る日、一家は娘の婚約者を誘つて、舟遊びに出かける。途中、海が荒れて、M氏と娘は船酔いで真青になる。娘の婚約者は、義理の間柄と聞いた筈のこの父娘の、二つ並んだ醜い顔の上に、著しい相似を認めて愕然とする。そして、秘密のあるらしい一家の素性に疑惑を抱き、娘から遠ざかってしまふ。M氏は、よかれと思つてしたこと意外な結果に失望し、家も国もすてて旅に出る。

この小品の主題は、こちらでいくら気のすむようにしようとしても、物事はその通りにならない、という点にあると思うが、



私が個人的な理由で、興味と親近感をもつたのは、血縁の不思議さを現すのに、船酔いをもってした場面であった。以来、私は乗物酔いを正当化する必要のある時は、いつも、この話をするにしている。

(女子大教授・英文学)

## 老 閑 記

藤林広超

中共のPR誌「人民中国」にのっている毛沢東の写真をみると、さすがに悠揚迫らぬ王者の風さえみえる。これを一九三七年四十四才の長征終えたときの写真——エドガー・スノーの「中国の赤い星」にでている、額に太い二本の皺立てた。みるからに陰惨な顔——と比較すると、殆んど別人の観がある。しかし、この変化こそが、中共が赤匪から大国に成長したことを物語るものでなくて、何であろう。これから国際的に、いろいろ困難なことはあるであろうが、それを乗りこえて、いつかは中庸を得た立派な国になるであろう。

日清戦後まだ二十世紀に間のある年のある日、明治天皇が京都に行幸なさるにつき、われわれ学生として、お通り筋の烏丸通に整列して、ひたすら陛下のおいでを待っていた。その時、いまとちがって道が狭かったので、すぐ前を、衣は軒に至り袖腕に至る書生の一団が、きちんと並びもせずのっしのっしと歩いていく。われわれ見て、「同志社や同志社や」私語したものである。そしてその中に、わたしは、若き日の林源三郎氏の姿をみたのである。それほど数が少なかった。氏は晩年左京におられたが、もとは家の近所で兄の友達でもあったのでよく知っていた。

いま西門から入ると、門から東へ一直線に立派に道がついている。同志社のメイン・ストリートだ。これは以前校外の道路であって、わたしは通った記憶がある。その時は南北に校舎が別れていたようだ。いまのようになったのは、恐らく今出川に電車が通るようになり、道路拡張のとき、換地したのではなからうか。烏丸通も同志社のすぐ北のところ、いまでも東側にその時分からの銭湯があるが、あの辺で、小さいお

宮サンに突当っていた。なにしろその時分は、鞍馬口が市の北端で、その北裏は野原だった。わたしの小学校の習字手本は京の町づくしで、はじめに「鞍馬口、慮山寺通、上立売……」とあったように思う。

三月二十日、かつての予科担任クラス卒業二十周年記念同游会。午前十時半拙宅集合。昼前、借切りバスで都ホテルへ、昼食。会員の二世が母校へ入学するようになったので、児玉実用教授から、学校の話いろいろ承る。午后名神高速道路ドライブ、山科から栗東までいき、戻りは京阪国道にて十条を東へ、渋谷から東山に登り、三条にて、今出川から新町校舎みて、山端平八茶屋へ、晚餐。きょうは原則として家族同伴だから、わたしも二人で出席。遠方で単独の人もあったが、大部分は奥様なり子供さんを伴って出席、二十人の大家族、一日なごやかな楽しい会であった。天気はよくなかったが、幸いドライブの間だけ降り、東山の展望台に立ったときはあがっていた。

(校友・元文学部教授・西宗寺住職)

## 門

### 中井汲泉

今は昔、明治四十年前後ともなれば一切が伝説。雲烟の中に消えてしまふ。同志社

女学校の門をはいって、左手に「かたみのみ松」第一流の名木があつた。祇園の夜桜、唐崎の松と比べて、なんら遜色のない太い幹を中心に垂れ下がる枝がどうにもならないのか支えの杖を十カ所ばかりついていてた。土塀に添うて広い芝生の一部百坪ばかりは松の下陰で、何ともさわやかな松一本の眺めでありました。当時、門衛をしていた老夫婦は上品な人柄で、尉と姥が出て来たよう。昔、藩はよく知らぬが家老職の家柄だつたとやら、弓や長刀の師範をしていられたから武芸百般に通じた人であつたらうと思う。明治の女学生風俗もまた格別で長いとも、紫紺のハカマ、日本の女学生独特の制服ならぬ制服で、今から考える、修道女の観があつた。長刀の型をけいこしていられた二十人ほどの一団を木刀一

本で指南していられた老剣士の風貌。かたみの松を背景に夕陽に天女乱舞する清浄なながめであつた。それも今出川に電車が走つて道路拡張の際、松をいねいに移植した枯れてしまつた。祇園の桜も唐崎の松も今はその第二世。名木の後継者よ、名木の跡目はつらいと思う。

そんな時代に私は同志社中学という普通部に入部したのであるが、教室は北寮の草叢の中で牛小屋みたい。劈頭第一、授業が丹羽校長の修身で西国立志編、漢文口調で「ニテアリシ」の直訳難解の文であつた。

「トンデモナイ学校へはいつて来たモンだ」と、早速、脳天をやられて悲鳴をあげたのだが、私は廿五年生まれ、新島先生は廿三年に亡くなつてござるから直に新島精神がわかる筈もなく、ピンと来なかつたのである。幸い原田助、波多野培根、三輪源造、加藤延年、秦孝道諸先生が新島先生の直弟子の駿足揃いであつたことを常に感謝している。「教員は兄貴なんだ。お前達は弟なんだユックリ行こうぜ」と一切を赦して下さつた諸先生のご寛容に敬意を払わざるを得ない。

最近同志社神学館の新校舎献堂の式の前に無断見学をしたのであるが、二階教室の窓から見る昔のままの御所の立木、今出川御門と相国寺門の対立、それをつなぐ道路が玄武町なのである。私はこの玄武町に生まれ、幼年・少年時代を過したのであるが、無用の用というのか現在の忙がしく、せせこましい世の中に昔のまま不開の門がある。相国寺の勅使門、御所の北門である。ただ眺めるだけの門が昔のまま残存していることが不思議でならないと同時に、悪童時代の夢が蘇み返えってくるのである。人通りのない玄武町よ何処のどんな造園よりもお前はモット立派な庭だよ。大学正門と女子部の門、門ばかりある風景。朝七時半、彰栄館の鐘が鳴る「せつしよな学校やし、せつしよな鐘やな」と思つて馳せつけたが、その日の説教は和田琳熊さん。淑女のような同志社紳士である。「相国寺の鐘はGONEとなる。彰栄館の鐘はCANと鳴る」話であつたが不思議に覚えていて、この窓から同志社を見ているのである。

(校友・わびすけ店主)